

出版界 この一年

森重良太*

2013年の出版界の概況について記す。特に出典元を明記していないデータ類は、一般紙（朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日本経済新聞など）のほか、「新文化」「出版ニュース」など、複数のメディアに広く掲載されたものである。

【1】出版界（2012年）の全体動向

本稿は2013年11～12月時点での執筆につき、2013年全体の具体的なデータは、まだまとまっていない。よって本項では、2012年の動向を中心に掲げる。⁽¹⁾

書籍と雑誌をあわせた推定販売金額は1兆7398億円で、前年比3.6%減。相変わらず下落傾向は止まらない。日本の出版社の数は2833社だそうである。これだけの数が寄ってたかって本を出しても、ヤマダ電機1社の売り上げ（約1兆8000億円）と並ぶ数字が精一杯なのだ。いかに小さな業界であるか知れよう。

推定販売部数は書籍が6億8790万冊、雑誌が18億7339万冊で、書籍は5年連続、雑誌は17年連続の前年比減である（特に雑誌は過去2番目の落ち込みを示した）。

返品率は、書籍が37.8%（前年比0.2%増）、雑誌が37.61%（前年比1.5%増）。かつての書籍40%台からは脱しているが、前年より微増となっており、10冊中3～4冊が売れずに返品されている状況は、あまり変わらない。

ところが、書籍新刊点数は7万8349点で、前年比3.3%増。相変わらず新刊点数は増え続けている。どの版元も、大量の新刊を刊行して、なんとか売上げを確保しようとしているようだ。この数字は、配本のない日曜日を除いた月～土曜日に、毎日約260点の新刊が店頭で並んでいることになる（仮に1点あたり5冊が配本される書店があったとすると、毎日1300冊の本が送り込まれてくる計算になる）。

書店の数は1万4696店。前年比365店減である（ただしこの数字は営業所や本部、外商拠点なども合算されているので、いわゆる「店舗」は、おそらく1万店強とみられる）。

書店関連では、カルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）が展開する「TSUTAYA BOOKS」（「TSUTAYA」「蔦屋書店」など全696店）の売り上げ（1097億円）が、それまでのトップ紀伊國屋書店（1081億円）を抜いてリアル書店第1位に躍り出たことが話題となった。

また、業界2位の取次トーハンが、大手書店チェーン「ブックファースト」（関西・東京で42店）の全株式を買収し、100%子会社化したとのニュースにも驚かされた。これによってブックファーストの帳合（主要取次）はトーハンになったはずで、ますます取次業界の独占競争に拍車がかかりそうである。

*もりしげ りょうた 日本大学法学部新聞学科 講師

【2】2013年の売れ行き良好書籍

今回も、取次のデータではなく、店頭調査を中心にしたデータサービス事業「オリコン株式会社」の総合ランキングを掲げる。⁽²⁾数字は「発行（印刷）部数」ではなく、「推定実売部数」なので、注意されたい。

- ① 『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』村上春樹（文藝春秋／2013年4月初版）
98万4783部
- ② 『医者に殺されない47の心得』近藤誠（アスコム／2012年12月初版）84万6985部
- ③ 『聞く力 心をひらく35のヒント』阿川佐和子（文春新書／2012年1月初版）
81万4393部
- ④ 『海賊とよばれた男 上』百田尚樹（講談社／2012年7月初版）74万1015部
- ⑤ 『30日できれいな字が書ける ペン字練習帳』監修・手本：中塚翠涛
（宝島社／2009年12月初版）71万8552部
- ⑥ 『とびだせ どうぶつの森 かんぺきガイドブック』週刊ファミ通編集部
（エンターブレイン／2012年12月初版）69万4580部
- ⑦ 『ロスジェネの逆襲』池井戸潤（ダイヤモンド社／2012年6月初版）63万9912部
- ⑧ 『海賊とよばれた男 下』百田尚樹（講談社／2012年7月初版）63万6917部
- ⑨ 『できる大人のモノの言い方大全』話題の達人倶楽部・編（青春出版社／2012年10月初版）
61万9955部
- ⑩ 『スタンフォードの自分を変える教室』ケリー・マクゴニガル／神崎朗子・訳
（大和書房／2012年10月初版）54万7141部

近年には珍しく、10位以内に小説が3作4点（①④⑦⑧）も入った。だが話題になった①をもってしても、実売はミリオンに届いていない。

②は最近大流行の「ガンと闘うな」説の急先鋒医師による集大成である。

⑤は2009年の刊行だが、著者のテレビ出演により人気に火がついた。⑦も人気テレビドラマ「半沢直樹」の原作シリーズである。

2013年は、本屋大賞も受賞した④⑧の百田尚樹ブームといっても過言ではなく、オリコンによる作家別実売ランキングでは、2位の近藤誠、3位の村上春樹を抑えて、堂々の1位である。特に『永遠の0（ゼロ）』（講談社文庫／2009年7月、文庫初版）が累計発行部数180万部を突破し、2013年最大の人気文庫となった。

【3】電子出版をめぐるあれこれ

① 電子出版の概況

2012年夏に楽天koboがスタートし、同年暮れにはAmazonによる電子書籍リーダー「Kindle」日本語版が出荷開始となった。そして2013年に入ってからApple iBookstoreがスタートしたことで、新プラットフォームの3大メジャーが勢揃いした。よって2013年は、電子出版の本格稼働開始の年といえた。

2012年度の電子出版全体の市場規模は768億円（前年比15.9%増⁽³⁾）。うち電子雑誌が39億円、電子書籍が729億円となっている。この電子書籍市場のうち、PC向けは10億円。これに対し、ケータイ向けが351億円、新プラットフォーム向けが368億円だが、今後は後者の圧倒的な伸びが予測されている。

これらの数字が大きいのか小さいのかは、なんともいえない。確かに期待ほど伸びていないのだが、少なくとも「前年比減」のデータばかりが並ぶ出版界にあって、2桁台の伸びを示しているのだから、景気の悪い話でないことだけは確かである。現に、電子出版の市場規模は2017年度には2400億円に達するとの予測が出ている。つまり、あと数年で電子書籍は、現在の紙の書籍・雑誌売り上げの1～2割を占める可能性があるというわけで、それが本当たとすれば、看過できない一大産業といえよう。

ちなみに、前記3大メジャーのうち、AmazonのKindleストア利用者が49.4%との調査結果があるので、日本の電子書籍市場はAmazonによって牽引されているといっても過言ではない。ただし、koboを展開する楽天の三木谷浩史社長は、2013年4月に開催された事業戦略説明会で「2016年までに年間500億円の売上高を目指す。2020年には市場規模は1兆円に達するので、同年には、その半分5000億円規模のシェアを狙う」と豪語している。

だが相変わらず問題はコンテンツ不足で、業界では「村上春樹、宮部みゆき、東野圭吾の3大人気作家が電子書籍を許諾しないかぎり、日本に電子出版の夜明けは来ない」と、半ば自虐的に語られている。

なお2013年も押し詰まった12月になって、紀伊国屋書店や日販、トーハン、さらに楽天やソニーの電子書店など計13社による「電子書籍販売コンソーシアム」が設立されたと報じられた⁽⁴⁾。これはリアル書店で電子書籍を販売する大掛かりなシステムで、2014年春に実験を開始するという。明らかにAmazonのKindleに対抗する措置と思われる。

② “電子発” の話題書

その一方で、“電子発” の話題書がいくつか誕生した。

『フィフティ・シェイズ・オブ・グレイ』上下（ELエルロイ／池田真紀子訳、早川書房、2012年11月初版）は、当初、ネット上で連載されていたが（著者はロンドン在住の主婦）、人気を呼んで、アメリカの出版社が新刊書籍として発売。全世界で6000万部以上が売れた。内容は、いわゆる官能ロマンス小説で、日本版も堅実な売れ行きだったようである。同じく『ウール』上下（ヒュー・ハウイー／雨宮弘美・訳、角川文庫、2013年9月初版）も、ネット上で発表されて話題となり、紙に移植された作品で、こちらはSF小説である。

SFといえば、『Gene Mapper -full build-』（藤井太洋、ハヤカワ文庫、2013年4月初版）は、もともとAmazonの自己電子出版「キンドル・ダイレクト・パブリッシング」により、Kindle上で販売されていた電子書籍であった。それが2012年10月31日、Amazon内の「文学作品」ランキング（紙の書籍も含む）で1位を獲得したことで話題となり、早川書房から声がかかり、紙で文庫化された。これがおそらく、日本における“オリジナル電子出版ベストセラー”第1号であろう。著者はもともと、グラフィックデザイナー、ソフトウェア開発者である。

6月、文藝春秋が、いままで一作も電子化されていなかった司馬遼太郎の人気作品『竜馬が

ゆく』の電子版の発売を開始。軒並み、各電子ストアで売り上げ1位にランクインした。これは紙の人気作品は電子でも売れることの証左ともいえ、今後、電子出版の起爆剤の一端となると見られている。

③ 「出版者への権利付与」問題

2011年11月に、浅田次郎、大沢在昌、永井豪、林真理子、東野圭吾、弘兼憲史、武論尊の7名の作家・漫画家が、書籍の電子出版用スキャン事業者（いわゆる“自炊代行業者”）の大手7社に対し、著作権侵害行為による差し止め請求を東京地方裁判所に提訴していたが、2013年9月から10月にかけて、すべての対象業者についての違法行為が認められた（一部、謝罪・和解もあり）。

これらは、外見上は「作家」が自ら提訴し、勝訴したように見えるが、実態は、大手出版社数社が共同で、作家を立てて提訴したものであった。ではなぜ、出版社が自ら提訴しなかったのか。現在の法体系では、出版者（社）は“自炊代行業者”を訴えることはできないのである。なぜなら、出版契約は出版者と著作権者との間で交わされ、これによって出版者に「出版権」が付与される。ところが現在の「出版権」とは、「紙」の出版物にまつわる権利であるため、紙の海賊版であれば出版者が自ら差止請求等を提訴することが可能だが、ここに電子書籍は含まれていない。よって、電子出版の海賊行為については、出版者が「出版権を侵された」と主張することは不可能で、著作権者が「著作権を侵された」と訴えるしかないのである。

この状態をどうするべきか、文化庁の文化審議会・著作権分科会・出版関連小委員会が検討を続けてきた。

そうしたところ、2013年2月に経団連が「電子書籍の流通と利用の促進に資する“電子出版権”の新設を求める」とのアピールを発表した。要点は「出版者ではなく、ネット業者も含む、電子書籍を発行する者すべてに、新たな“電子出版権”を与えよ」というもの。

つづいて4月には、東京大学名誉教授で、明治大学研究・知財戦略機構の特任教授・中山信弘氏ら6人が「出版者の権利のあり方に関する提言」を発表。「出版社に隣接権を付与するのではなく、従来の出版権を拡張し、電子出版にも対応した著作権法の改正を検討するべき」と提言した。

そして5月から9月にかけて、上記・文化審議会が「4つの選択肢」を提示する。つまり——①著作隣接権の創設、②電子書籍に対応した出版権の整備、③訴権の付与（独占的ライセンスへの差止請求権の付与の制度化）、④契約による対応、である。さらにいままでの論点を整理し、広くパブリック・コメントの募集を開始。出版界周辺の各団体もさまざまな意見を表明し、とてもこの紙幅で述べることは不可能な、百家争鳴の状態が現出している。おそらく2014年から2015年にかけて、何らかの形で、著作権法の一部改正が行われるのではないかと見られている。

④ 図書館をめぐる電子出版ビジネスの激化

10月15日、KADOKAWA、紀伊國屋書店、講談社の3社は、学校・公立図書館向けの電子書籍貸し出しサービス会社「日本電子図書館サービス」を設立した。

続く同月29日には、大日本印刷（DNP）、日本ユニシス、図書館流通センター、丸善の4社が、2014年4月から共同で、クラウド型の電子書籍サービスを図書館向けに提供すると発表した。すでに札幌市が採用を決定しているという。

かくして今後は図書館が電子出版ビジネスの主戦場になる可能性が出てきた。

ちなみに電子出版ではないが、クラシックCD会社のナクソス・ジャパンは、近年、配信事業に力を入れており、すでに図書館や学校に事業主力を移しつつある。現在、同社のストリーミング配信サービス「ナクソス・ミュージック・ライブラリー」（NML）では、会員（個人会費は月額1890円）だと世界662社の、8万枚近いCD（約120万曲＝2013年末現在）が聴き放題である（CD購入リンク付き）。同社は、このシステムを図書館に売り込んで成功している。つまり図書館はCD現物ではなく、一定期間だけ使えるパスワードを貸し出すのである。当然ながら8万枚のCD在庫を館内に抱えるよりはるかに安価である。また、音楽大学と契約し、学生専用のパスワードによって、PCやスマートフォンでも聴けるようにしている。これもまた、学内に8万枚のCDを確保したも同然で、学生は自宅でもどこでも、あらゆる楽曲を自由に聴くことができる。

出版界も、このシステムを参考にすべきではないだろうか。

【4】 そのほかの話題

- ・ 1月19日、第148回芥川賞の受賞者が決定し、その一人、黒田夏子が過去最高齢の75歳での受賞ということで話題となった。
- ・ 3月16日、日本最大の売場面積（3000坪）を有する書店「蔦屋仙台泉店」がオープンした（ただし、文具やゲーム、食品までを含む複合店）。
- ・ 4月12日に発売された、村上春樹の3年ぶりの長編小説『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（文藝春秋）が、発売前に4刷・累計50万部に達し（最終的に発行部数100万部超）、発売日の深夜午前0時に売り出す書店が出る騒ぎとなった。
- ・ 7月11日、カルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）は、2015年夏にオープンする宮城県多賀城市図書館の設計・建設を受注したと発表。11月21日には、神奈川県海老名市が、市立図書館指定管理者として、同社を指名。今後、佐賀県・武雄図書館につづく、CCCによる“TSUTAYA図書館”が続々誕生するものと思われる。
- ・ 10月1日、KADOKAWAは連結子会社9社を吸収合併した。これによって、角川書店、エンターブレイン、アスキー・メディアワークス、中経出版などを含む、連結売上高1616億円の、国内最大の出版総合企業グループが誕生した。

【5】 2013年の、出版関係の主な物故者（カッコ内は没月日）

鳥居民（1月4日／作家・評論家）、大島渚（1月15日／映画監督）、柴田トヨ⁽⁵⁾（1月20日／詩人）、常盤新平（1月22日／作家・翻訳家・「ミステリマガジン」元編集長）、安岡章太郎（1月26日／作家）、高野悦子（2月9日／岩波ホール元支配人）、ドナルド・リチャー（2月19日／映画評論家）、いわしげ孝（3月9日／漫画家）、石坂まさを（3月9日／作詞家）、山口昌男（3月10日／文化人類学者）、北原亜以子（3月12日／作家）、大橋鎮子（3月23日／「暮しの手帖」元編

集長・社主)、E. L. カニグズバーグ⁽⁶⁾(4月19日/児童文学作家)、島森路子(4月23日/エッセイスト・「広告批評」2代目編集長)、佐野洋(4月27日/推理作家)、河竹登志夫(5月6日/演劇学者)、なだいなだ(6月6日/作家・精神科医)、高橋たか子(7月9日/作家)、野上龍雄(7月20日/脚本家)、戸井十月(7月28日/作家・ルポライター)、富田倫生(8月16日/編集者・「青空文庫」創設者)、谷川健一(8月24日/民俗学者・歌人)、山崎豊子(9月29日/作家)、トム・克蘭シー(10月1日/作家)、天野祐吉(10月20日/コラムニスト・「広告批評」創刊編集長)、やなせたかし(10月13日/漫画家)、岩谷時子(10月25日/詩人・作詞家)、シド・フィールド⁽⁷⁾(11月17日/脚本家・シナリオ講師)、甘糟章(11月19日/「平凡パンチ」「週刊平凡」「anan」元編集長・マガジンハウス元副社長)、辻井喬(11月25日/詩人・作家・セゾングループ元代表=堤清二)

なお最後に、昨年も記したが、メディア業界を志望する学生のための、「新聞・本の読み方」「書店ガイド」「図書館の使い方」「正しい字の書き方」「原稿用紙の使い方」といった、「読む」「書く」「調べる」にまつわる初期学習の必要性を、ますます強く感じている。それらを大学入学と同時に始めないと、一度も寿司を食べたことのない寿司職人を育成するような、なんとも空洞化した教育システムが定着してしまうような気がしてならない。

(敬称略)

注

- (1) 「出版指標 2013 年版」(公益社団法人全国出版協会 出版科学研究所)より。
- (2) 集計期間は2012年11月19日～2013年11月17日、調査店1940店。
- (3) 「電子書籍ビジネス調査報告書 2013」(インプレスビジネスメディア)より。ほかのデータも同レポート、もしくは「インプレスビジネスメディア」より。
- (4) 朝日新聞 2013年12月22日付、1面より。
- (5) 詩集『くじけないで』が160万部を突破した、“100歳の詩人”。
- (6) 児童文学のロングセラー『クローディアの秘密』(岩波少年文庫)の著者。
- (7) 『映画を書くためにあなたがしなくてはならないこと シド・フィールドの脚本術』(フィルムアート社)などの著者。